

平城京二条大路東一坊域の調査

—第576次

1 はじめに

本調査は国土交通省による史跡朱雀大路等の整備にともなう調査である。調査目的は、既往の調査（第566次調査西区、190頁参照）の二条大路の西一坊域で検出された大路を横断する南北溝SD3400について、対称地である東一坊域での有無を確認し、計画的に配置された溝であるかの検証であった。調査面積は230㎡である。

調査は2016年10月12日に開始し、11月30日に終了した。

2 基本層序

調査地の基本層序は、整備盛土（約120cm）、耕作土（10～15cm）、床土1（約20cm）、床土2（約20cm）、整地土、地山である。二条大路北側溝は、整地土上面（標高63.5m付近）で検出した。

3 検出遺構

本調査では、二条大路北側溝と自然流路を検出した。自然流路は調査区中央付近で幾重にも重複していた。調査区の東端では、1980年代に二条大路の整備で埋め立てられた北新大池とその堤を検出した。

二条大路北側溝SD1250 検出面で幅6.0m（東側）～7.5m（西側）の素掘りの東西溝。西側が膨らむのは、宮内からの中央大溝SD3715との合流部が近いためと考えられる。もっとも深い部分で深さ約1.5m（標高約62.0m）。最下層の粗砂層からは、完形の土器や横櫛、木簡など多くの遺物が出土した。その上層の暗灰色砂層や灰色粘土層からも一定量の遺物が出土している。

黒色土溜SU19960 SD1250のもっとも深い部分の黒色土の溜。木簡（主に削屑）や種子などが溜まる（図310）。

杭列SX19961 北側溝の中央付近に1条の杭列を検出した。杭の直径は3～4cmで5本が並ぶ。この杭列は、本調査区東側の第167次調査で検出した二条大路北側溝の南岸杭列の位置とほぼ一致する。樹種は西からスダジイ、カマツカ属、ツブラジイ、カマツカ属、マツ複雑管束亜属である。それぞれ小径の心持材を用いている。

自然流路（NR19962～NR19966） 調査区中央付近を北

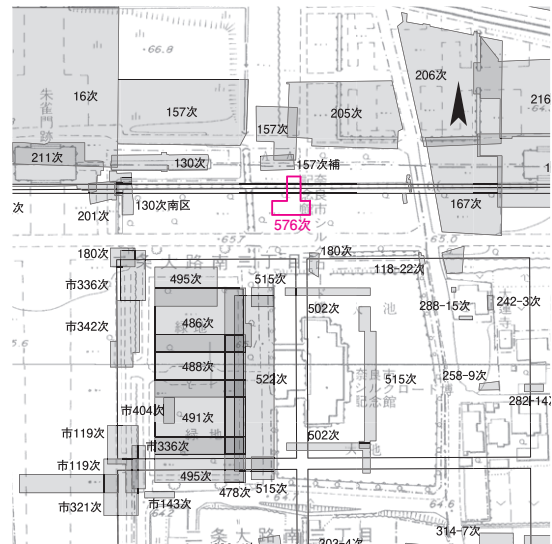


図306 第576次調査区位置図 1：3000

西から南東へ流れる自然流路。いくつもの流路が重複している。重複関係から新しい順に記述する。

自然流路NR19962 幅約1.2m、深さ約0.3m。北半に11～14世紀の瓦器碗片が入る。

自然流路NR19963 幅最大1.8m、深さ約0.2m。奈良時代の土器片が入るが時期の確定はできない。

自然流路NR19964 幅0.6～1.0m、深さ約0.1m。奈良時代の土器片が入るが時期の確定はできない。

自然流路NR19965 幅約1.0m、深さ約0.3m。埋土上層には12世紀後半～14世紀前半の瓦器碗片が入る。

自然流路NR19966 幅約1.2m、深さ約0.2m。目立った遺物がなく、時期の確定はできない。（浦 蓉子）

4 出土遺物

多くの遺物は、二条大路北側溝SD1250より出土した。

土器・土製品

奈良時代を中心とした整理用コンテナ7箱分の土師器・須恵器・黒色土器・硯・土馬などが出土した。ここでは二条大路北側溝SD1250から出土した土器・土製品を図示する（図309）。2・4・8・9は暗灰色砂層、1・3・5～7・10～14は粗砂層からの出土。

1～3は土師器。1は杯A、2・3は椀A。いずれも外面にヘラケズリを施し、ミガキを施さないc0手法が確認できる。4は完形の黒色土器A類椀。内外面に丁寧なヘラミガキが施される。奈良時代末ごろにみられる口径の小さい椀Aである。内面にススや油の残滓の痕跡を

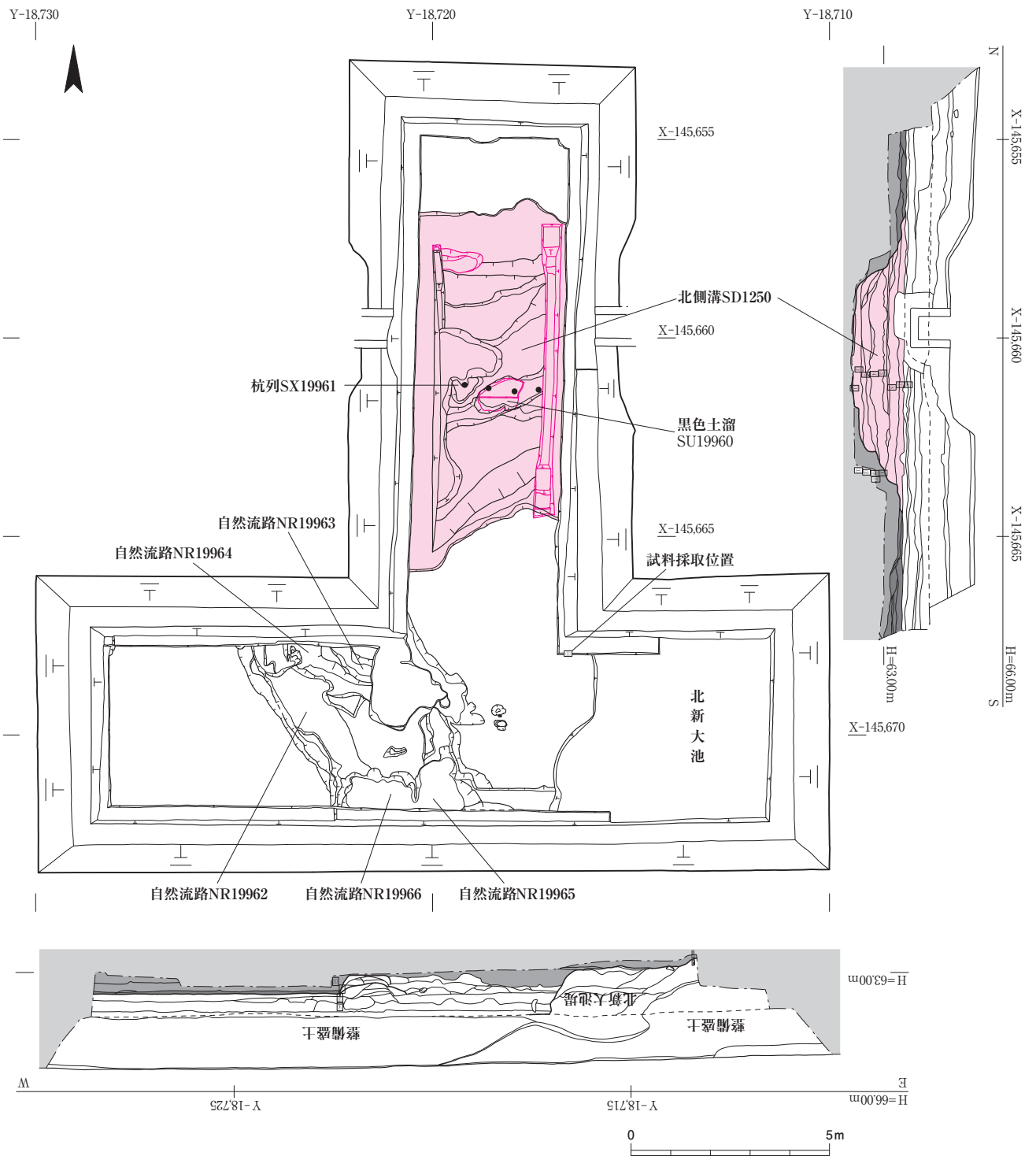


図307 第576次調査遺構図 東壁・南壁土層図 1 : 150

確認でき、灯明器として用いられたものとみられる。5～11は須恵器。5は杯A。底部はヘラ切りののちにナデを施す。焼成温度のためか全体的に黒褐色を呈す。6・7・8は杯B蓋。端部がS字状に屈曲する形状である。9・10は杯B。体部は底部との境で直線的に立ち上がる。5は底部外面に墨書が認められる。やや不明瞭だが、

「十」または記号とみられる。11は壺の底部。体部外面の底部付近はロクロケズリを施す。12は蹄脚円面硯の脚部。硯部・脚部・台部基底を一連で製作する蹄脚硯B(『平城報告Ⅶ』)に該当する。13は土師器壺B。完形。外面に4つの円が描かれ、そのうち2つは中心に縦線や釣り針状の線を追記する。人面墨書土器の目を表現したものと

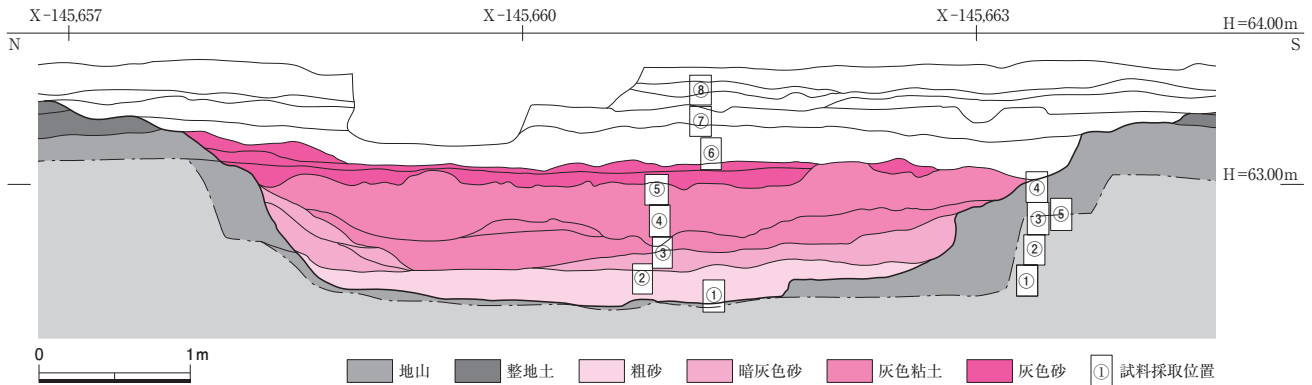


図308 二条大路北側溝SD1250 土層図(調査区東壁) 1:50

考えられる。14は土馬。頭部は失われているが、手綱の部分の粘土の貼り付けが確認できる。

以上の土器・土製品は奈良時代後半の特徴を有するものと考えられる。(丹羽崇史)

瓦類

本調査で出土した瓦類は表46に示した。二条大路北側溝SD1250からは軒丸瓦が28点、軒平瓦が7点出土した。軒丸瓦は6284A、6225A、6282Gが各1点出土したほかは、すべて藤原宮式である。軒平瓦は6685B、6711A、6721C・Gである。これらの軒瓦は、平城宮南面築地大垣の瓦であろう。藤原宮式の軒丸瓦は築地大垣造営時の瓦と考えられるが、組合う同時期の軒平瓦は出土していない。築地大垣造営時の軒丸瓦に比して軒平瓦の数が非常に少ない状況は、SD3715以东の平城宮南面築地大垣と一致する(300頁参照)。(今井晃樹)

木器・金属器

木器・金属器は二条大路北側溝SD1250から出土した(図311)。木器は1のみ灰色粘土層出土、それ以外は粗砂層出土である。また、金属器は西側の断割部分からの出土である。

1は人形。正面全身人形で、頭頂は山形で、肩、手、V字に切り抜く脚の表現がある。板目取りで、頭部から脚部中央にかけて木目に沿って割れが入る。意図的に割りを入れたものか。墨描きで顔の表現と顎鬚がある。胸には記号が記されるが、意図は不明。『木器集成図録近畿古代編』のAⅡa型式。長16.4cm、幅2.4cm、厚0.7cm。2は付札状木製品。上部と下部に2ヵ所切り欠きを設ける。上部の切り欠き部分には紐によるものと思われる圧

痕が残る。墨痕は認められない。板目取り。長19.2cm、幅1.9cm、厚0.4cm。3・4は横櫛。3・4ともに長方形で肩部に丸みを持つAⅡ型式。3は3cm間に歯数24枚を挽き出す。残存長7.5cm、幅4.6cm、厚0.8cm。板目取り。広葉樹。4は上部が緩やかにカーブする。3cm間に歯数26枚を挽き出す。残存長8.3cm、幅5.0cm、厚0.7cm。

5は鉄鎌。鎌身の断面が方形の鑿根式で、台形関を有する。長9.6cm、幅1.45cm、厚0.65cm。茎長3.3cm、鎌身長6.3cm。(浦)

木簡

木簡は563点(うち削屑521点)が出土した。すべて二条大路北側溝SD1250からの出土である。層位別にみると、灰色粘土層から1点(削屑なし)、暗灰色砂層から427点(うち削屑399点)、粗砂層から92点(うち削屑81点)、黒色土溜SU19960から42点(うち削屑41点)、出土層位不明1点(削屑なし)となる。ここでは主要なもの11点を報告する(図312・313)。

1～8は暗灰色砂層からの出土。

1は棒軸を二次的に加工し、何らかの製品に転用したもの。摂津職は摂津国の行政などを担当した令内官司。摂津国には難波津や難波宮が所在したため、京職に準じて特に「職」が置かれた。奈良時代を通じて存続したが、延暦12年(793)3月に廃され、以後は他国と同様に国司が任命された(『類聚三代格』巻5、『日本紀略』同月丁亥〔9日〕条)。考文は官人の一年ごとの勤務評定報告書類。ある年の摂津職所属官人の考文などをまとめた帳簿の軸であった可能性がある。

2は塩の進上状とみられる文書木簡の断片。本調査出

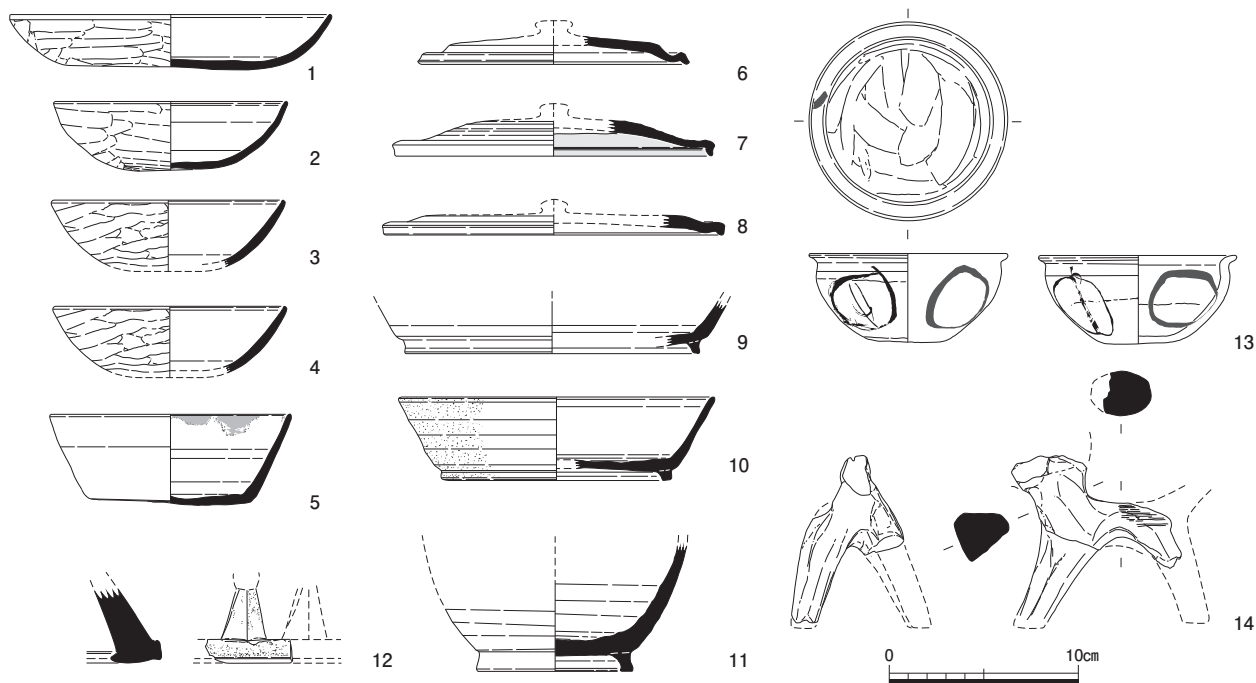


図309 二条大路北側溝SD1250出土土器・土製品 1 : 4



図310 二条大路北側溝SD1250最下層 黒色土溜SU19960 (東から)

表46 第576次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6225	A	2	6685	B	1	丸瓦 (刻印)	1	
6233	Ba	2	6710	C	1	平瓦 (ヘラ書)	1	
6273	B	1	6711	A	2	鬘斗瓦	2	
6275	A	3	6721	C	2	瓦製円盤	1	
	C	2		G	1	凝灰岩	1	
6281	Ba	1	型式不明(奈良)		2			
	Bb	3						
	B	1						
	?	1						
6282	G	1						
6284	A	1						
6308	C	1						
6316	?	1						
藤原官式		3						
平安		1						
型式不明(奈良)		11						
時代不明		3						
軒丸瓦計		38	軒平瓦計		9	その他計		6
		丸瓦			平瓦	磚	凝灰岩	レンガ
重量	123.542kg	261.238kg	3.014kg	2.029kg	0			
点数	1129	5098	7	18	0			

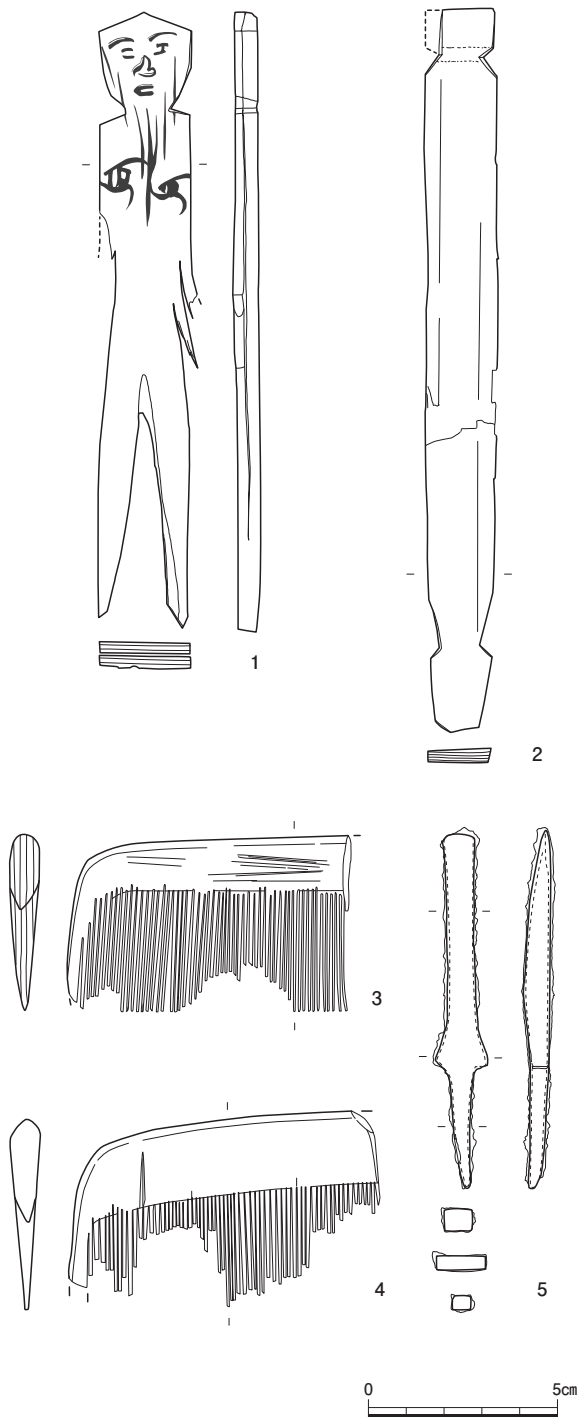


図311 二条大路北側溝SD1250出土土器・金属器 1：2

土木簡では唯一の紀年銘資料となる。延暦2年は783年で、長岡京遷都の前年にあたる。

3は縦割り状の断片で、墨書は右端3分の1ほどしか残らない。陽胡氏は百済系の渡来系氏族で、「楊胡」「陽侯」などにも作る。姓ははじめ史(毗登)であったが、

神護景雲2年(768)に楊胡毗登人磨が忌寸を賜ったことが『続日本紀』にみえる(3月癸丑〔9日〕条)。

4は長大な削屑で、下側の断片が上にのるように少しずつ重なりながら3片が接続し、全長は20cmを超える。右辺は原形を保つ。末尾の2文字は「近衛」とみられ、そうであれば授刀衛が近衛府に改編された天平神護元年(765)以降の資料となる(『続日本紀』同年2月甲子〔3日〕条)。本貫地に「人」を付記するのは選叙木簡の特徴だが、選叙木簡では割書左行に本貫地を記すのが一般的で、右行に記す4の書式は異質。末尾の記載からは、考選関連木簡でない可能性も考えられる。「近衛」の上の文字は「充」「元」などの可能性があり、あるいは舎人の配属などに関わるものであろうか。広義の人事関連業務のなかで用いられた、類例の知られていないタイプの木簡の可能性はある。

5は山城国相楽郡、6は武蔵国入間郡を指すとみられる。特に5は「郡」の下に「人」の字が認められ、いずれも選叙木簡、または4と同種の木簡の本貫地記載部分に由来する削屑の可能性が高い。

7は「去年の勤務評定が中上」の意味。上上から下下までの9段階での評価を受ける内長上官人の考課木簡由来の削屑であろう(ただし、大宝令制下では内分番のうち舎人だけは9段階評価を受けた)。8も考選や任官など人事関連の木簡に由来する可能性がある。

9～11は粗砂層からの出土。

9は習書木簡。表面1文字目は「目」を左右に並べた文字で、「明」または「朋」の異体字の可能性はある。裏面にはツルとみられる鳥の墨画なども描かれる。

10は3に似た縦割り状の断片。下端の文字は筆が細く、別筆とみられる。

11は「雅楽寮立歌師」などと記す削屑。雅楽寮には歌師四人が置かれ、歌人や歌女への教習などを掌った(職員令)。相当位階は従八位上(官位令)。また、『令集解』職員令雅楽寮条令積は四人の歌師のうち三(「二」の誤カ)人は「立歌」、二人は「大歌」とし、同条に引かれる大属尾張浄足説にも「歌師四人。立歌二人。大歌笛師二人」とある。末尾の文字は「六」または「七」か。

このように、本調査出土木簡は(考選や任官・配属など広義の)人事に関わるとみられる資料を多く含む点に特徴がある。廃棄元としては文・武官の人事を分掌する式

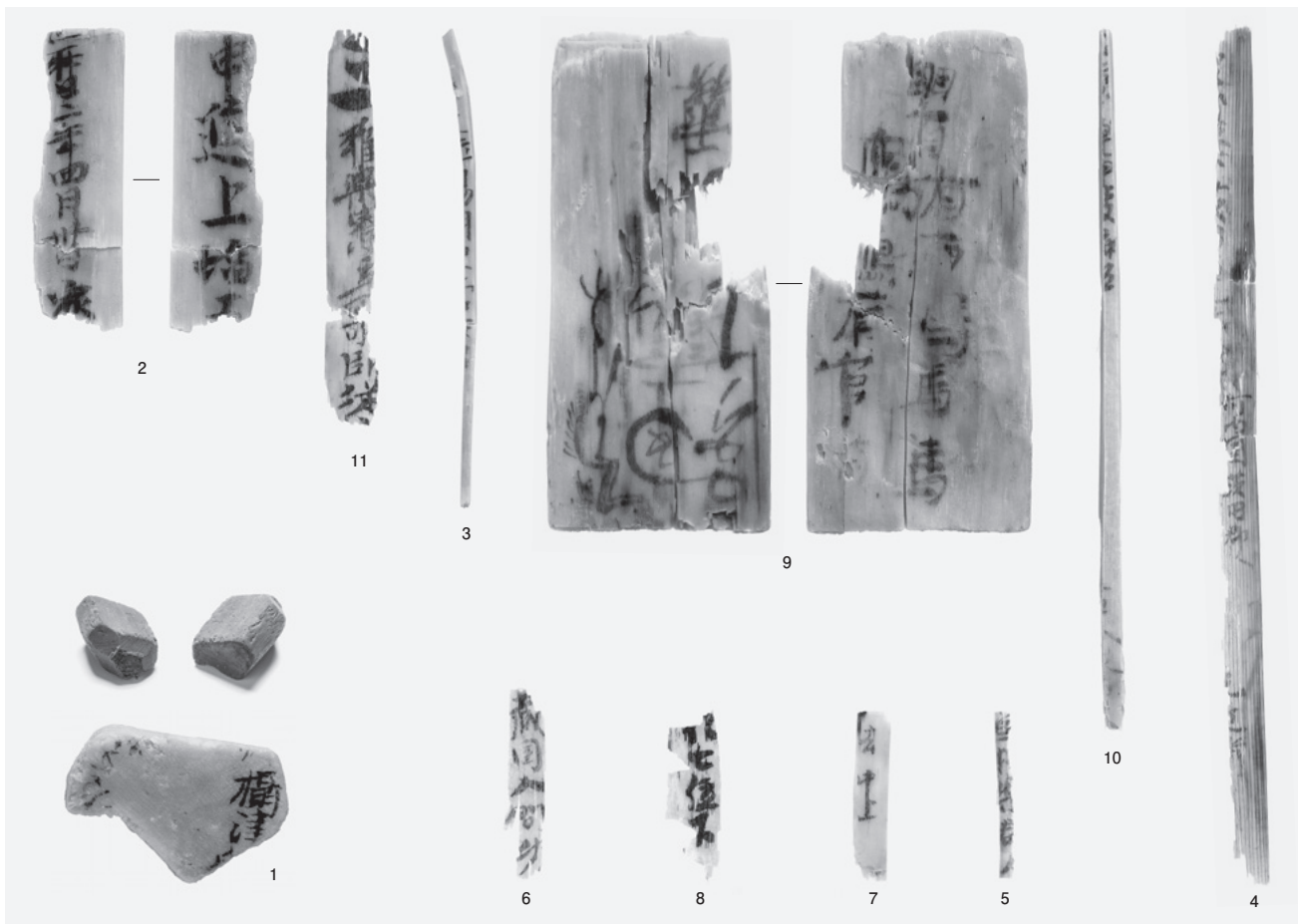


図312 第576次調査出土木簡 赤外線写真 (1:2 1のみ原寸)

暗灰色砂層出土										
11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
<input type="checkbox"/> 〔三カ〕 <input type="checkbox"/> 「雅楽寮立歌師從」 <input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> 〔連甲斐麻呂カ〕 <input type="checkbox"/> 〔人カ〕 <input type="checkbox"/> 〔人カ〕 <input type="checkbox"/> 〔人カ〕	・ <input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 有カ <input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 有カ <input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 有カ 〔鴈カ〕 〔女鑿〕 〔女カ〕 (他、墨画ナド多数アリ)	從七位下	去中上	藏国入間郡	<input type="checkbox"/> 国 <input type="checkbox"/> 相カ <input type="checkbox"/> 樂郡人	<input type="checkbox"/> 〔從八位下茨田カ〕 <input type="checkbox"/> 〔河内国茨田郡人〕 <input type="checkbox"/> 〔近衛カ〕	<input type="checkbox"/> 〔无位陽胡史〕 <input type="checkbox"/> 〔麻呂カ〕	・ 申進上塩 <input type="checkbox"/> 〔五カ〕 ・ 延暦二年四月卅日 <input type="checkbox"/> 〔家カ〕	撰津 <input type="checkbox"/> 〔職カ〕 : <input type="checkbox"/> 〔考文カ〕 : <input type="checkbox"/> 〔木口〕
091	(168)・(5)・9 081	123・55・5 011	091	091	091	091	091	(116)・(3)・6 081	(74)・(22)・1 081	長さ(34)・径26 061 (棒軸)

図313 第576次調査二条大路北側溝SD1250出土木簡 釈文

部省や兵部省が想起されるが、本調査区の位置（朱雀門と壬生門の間）や二条大路北側溝SD1250の流れの向き（西から東へ）からは、兵部省に関わる資料群である蓋然性が高いと考えられよう。兵部省は本調査区の北東に隣接し、敷地の西側には中央大溝SD3715が南流していた。このSD3715に投棄された兵部省関連木簡がSD1250に流れ込んだ可能性は充分想定される。4に「近衛」とみられる記載が認められることも示唆的である。一方、1の撰津職や11の雅楽寮などのように、文官に関する資料も存する。また、官人の考選はまず所属官司の長官・次官がおこない、その後に太政官経由で式部省や兵部省に報告され、取りまとめられた。すなわち、広義の人事のうち少なくとも考選に関わる業務は各官司内でもおこなわれていたのであり、宮内官司がSD3715に投棄した資料が本調査区まで流れ着いた可能性も否定はできない。本調査出土木簡については、複数の廃棄元に由来する資料が混在するとみておくのが穏当であろう。（山本祥隆）

5 自然科学分析

本調査では、1) 二条大路北側溝SD1250の埋没過程を地山の堆積環境を含め検討すること、2) 斜行溝であるNR19962～NR19966の性質と埋没環境、3) 整地土の堆積環境をあきらかにする課題のもと、地質切取試料の採取をおこなった。今回の報告にあたり、これらの課題のうち特に二条大路北側溝SD1250の埋没過程を地山の堆積環境を含めて検討することに焦点を絞った。その他の課題については継続的に分析をおこない、あきらかにしていくこととする。

試料と方法 試料は調査区東壁から採取した（図314）。試料の切り取りに際しては、スチロール製の角型ケース（縦221、横141、厚さ37mm）を用い、切り出す対象の壁面を浮き出させるようにして切り取った。試料は持ち帰った後に整形し、層相写真撮影、層相観察をおこなった。その後、フジフィルム社製軟X線撮像装置とイメージングプレートを用いて地質構造の撮像をおこなった。

結果 地山とした最下層は泥質の氾濫原堆積物からなり、朱雀門南側の多くの場所で観察された完新世の堆積物と層相は共通する。29層の下部はこの地山層からの浸食泥塊（マッドクラスト）が混入する不明瞭なラミナ構造をもつ河川性堆積物からなる。本層は上位に向かって

明瞭なクロスラミナが発達し、流水環境の成立が示された。この層がSD1250機能時を示す。28層では、葉片と植物遺体が集積する最下部の上位に比較的平滑なラミナ構造が発達する。このラミナは29層に比べ堆積物を構成する粒子の粒径組成が全体的に細かいことから、溝を流れる流速の減退や水位の低下といった流量の低下を示すと考えられる。また28層は上位から大きく荷重を受けている。形状としてややいびつなため、必ずしも足跡の踏み込み痕と現段階では断定できないが、今後X線CTなどを用いて立体的な検討をおこないたい。25層から上位の層は、堆積物中に人為の影響がうかがえる。花粉分析や珪藻分析を加え、堆積の様相をあきらかにしていく予定である。また23c層には砂脈とみられる液状化痕跡が観察された。引き続き調査をおこなっていききたい。

（村田泰輔）

6 まとめ

本調査の目的は、第566次調査西区で確認された二条大路を横断する南北溝SD3400について、朱雀門を挟んでその対称地である東一坊域において、対応する溝の有無を確認することであった。

結果として、今回の調査では二条大路を横断する南北溝は確認できなかった。特に、宮内から続き南面大垣を貫流する中央大溝SD3715（第157次補足調査）は二条大路を横断しないことがあきらかとなった。このことから、二条大路の東一坊域における排水計画は、西一坊域の様相とは一様ではなかったことが判明した。

さらに、本調査ではその想定位置に二条大路北側溝SD1250を約3.8m検出した。また、北側溝SD1250の暗灰色砂層からは奈良時代後半の土器と、延暦2年の紀年銘木簡が出土している。二条大路北側溝SD1250は奈良時代の当初から機能していたと想定されるが、今回の調査では、奈良時代後半から末にかけて開口していたことが判明した。

（浦）

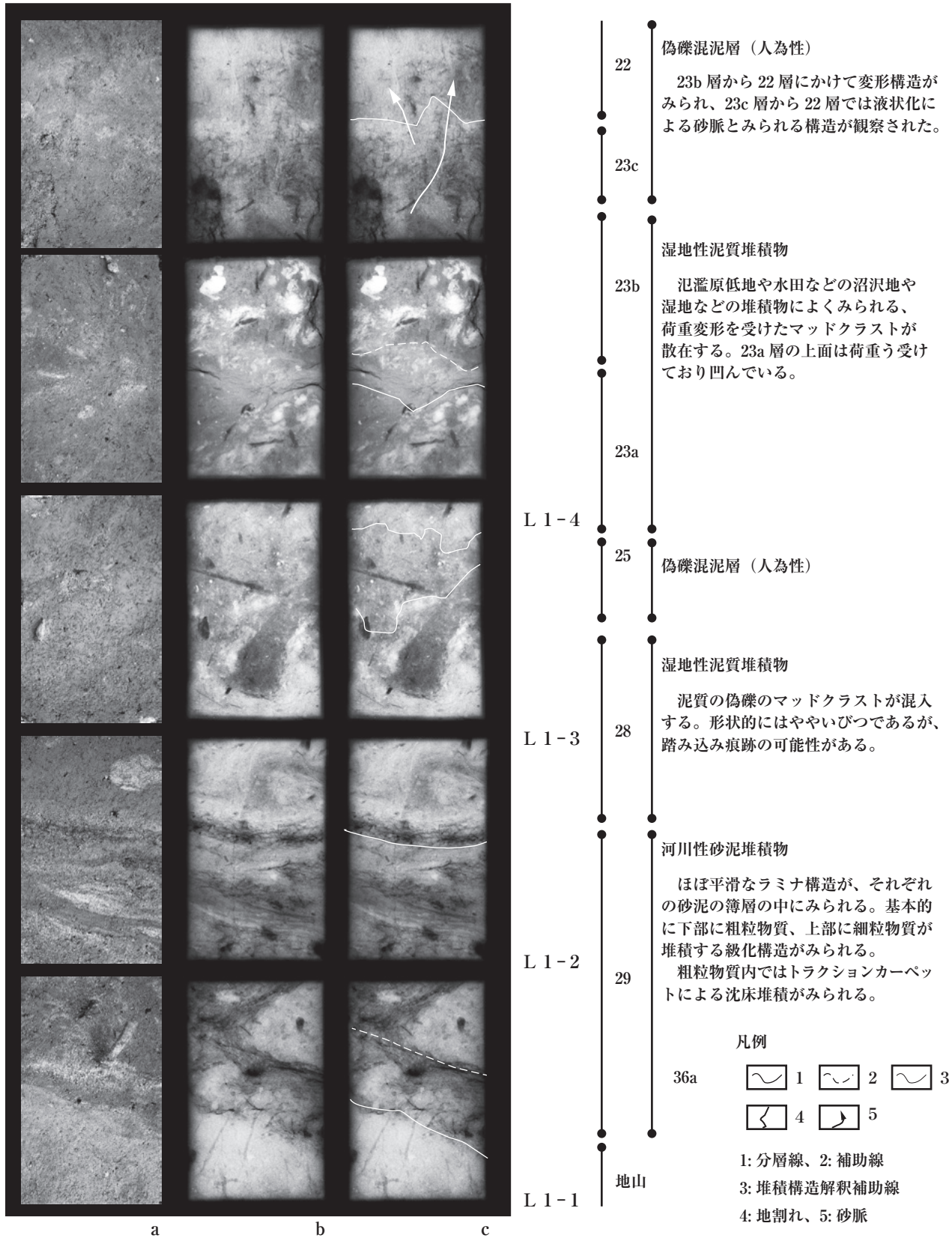


図314 第576次調査区東壁軟X線撮像